

臨終表情

木谷蓬吟

この近い時代には、太夫三味線弾きの名匠は相當に現れて出たが、人形遣ひの名手は甚だ稀にしか見られなかつた。私が明治三十年頃から、文樂、稻荷、堀江、近松の各座を見て廻つたらちに、斷然頭角をぬいて出た傑物は、

吉田玉造と桐座紋十郎の二人、次いで二代三代の玉造に多爲歳ぐらいのものである。殊に珍重されたは初代玉造の修羅物の豪宕雄大、それに大衆大歡迎の的となつた動物遣ひ、狐、猿、獅子や鬼畜の活躍ぶり、更に宙釣り宙駆けりの冒險的妙技、早替りの電光石火的な魔術藝など、ケレンとけなされ、邪道と難ぜられたが、とにかく文樂の大入は主としてこの呼び物の爲だといふのが、

藝術至上の擬装を撤廢した眞實の聲であらう。そしてこのケレン藝は彼の親しくした市川小團次(當時米十郎)や梅玉歌右衛門の影響が少くはなかつたと思はしめる。

この玉造、十一歳から舞臺に出て十七歳の最期まで六十余年の手すり生活を、殆ど一つの文樂座で跳ねたり躍つたりした。その功勞が物をいふて、人形遣ひにしては空前絶後の「文樂槽下」の榮冠を占めるに至つた。そして明治三十八年二月十二日に、大寶寺町の陋屋で亡くなつたが、その息を引取る間際まで、寸時も肌身を離さず大切に抱きかゝえてゐたものがある。それは、うこん木綿の薄汚い胴巻だつた。この胴巻は玉造のへそくり金の唯一

金庫で、家内でも芝居でも舞臺までも暫しも肌から離さなかつた。この胴巻なかく重くて、どつさり嵩が高い、死後、懷から取出して開けて見ると、驚いたことには、金は金だが五十錢銀貨ばかりで、汗のためかスツカリさびついで古色蒼然。彼は常に家族にいふていたのは、紙幣だと破れ易いし、政府の懐工合で何時反古にされるか知れない、また銀行や他人に預けるのも不安心だし、火事の心配もあるから銀貨でためておいた、これなら潰しも利くから、めつたに損はしないと、これが玉造得意の貯蓄哲學論の全部。

淨るり仲間では、玉造を「けんちんぼろの槽下」と悪口を叩いてゐたが、それも一理はないでもないが、この吝嗇は二十萬圓貯蓄の成功者廣助とは、またその趣きが違つた。玉造は愛兒の俊才玉助を早く亡くした上に、孫の富吉は盲目の身であり(今の富崎春章檢校)、かたがた死後の家族の困らぬようにと、温い親心からであつた。頑固で強情で冷血漢のように噂された半面に、こうした人間味が秘められてゐ

た。更に一例をいふと舊恩のある新町扇屋の遺兒名優鴈治郎の貧乏暮しを救ふて、吉田玉太郎の藝名で文樂で働かしてやつたといふ、隠れた報恩美談もある。錆びつくまでに、後生大事と溜めこんだ銀貨は、臨終にまで抱えてゐたが、その汗臭いうこん木綿の胴巻には、世間に知られぬ玉造が親心の玉の光りが、さんらんと輝いてゐる。

玉造の荒事と對象的な盛觀を添えたものに、桐竹紋十郎の女人形がある。この兩名人、同じく親からの人形遣ひ、蛙の子は蛙であつたが、天地を吞吐する蝦蟇仙人に變生したからすさまじい。玉造の堅氣一遍で無愛想なのに對して、紋十郎のひょうきんな洒落氣質も妙、それでゐて、政岡、板額、お辻、玉手御前など、女丈夫で見物を感懐させるのは更に妙である。若年ぼんくら時代、江戸から大阪歸參の名残に、やつとのことに「忠九」の下女を遣はせてもらつて、後世へその型を残したといふ非凡さ。文樂に入つては明治九年の春「一の谷」の相模で世を驚かし、一躍名人として出世。俳優に女方のユツや型を教えたのも、主として紋十郎

であつた。「葵責」の阿古屋が振り仰向いて重忠を見る、あの溢れるばかりの情味はどうにもこうにも真似ることが出来なかつたと、某優は述懐した。

死の少し前、腕試しに阿古屋の人形を特に三貫目も重く新調して遣ふた時、こう疲れを覚えるようでは、わしの前途も長くはあるまいと語つたが、果して明治四十三年夏、六十四歳（實は七十歳、藝人は若いがいよと戸籍面をゴマ化した）で永眠した。その最期の前日、いよ／＼危篤といふに、仰向に寝たまゝ、手を振り足拍子をととり活潑な掛聲をかけて人形を遣ふ振をした、廿四孝狐火、八重垣姫の狂ひらしい。看護の人たちは皆聲を呑んで泣いたといふ。歌舞伎の名作者並木正三が死の直前、眼をクワツと見開いて「南無三寶」と大喝し、そのまゝ絶息したとある作者氣質と並べて、眞に一對の名人臨終曲の冠絶か。

この紋十郎に似て、ユーモアで大きな巨匠に、同時代の五代目竹本春太夫がある。攝津大掾や大隅太夫の師匠、初め素人角力の三役格として郷里堺で鳴らしたが、放蕩の果は大阪へ落ちて來て漂浪、天満靈符の湯屋の三助まで

働いたといふが、今度は好きな淨るりが天稟の音聲にはまつてか、このドン底生活からスルスルと經上つて、天下の文樂の櫓下へと登りついた大天才。大よつて度量が廣く情の厚い性情は、そのまゝ藝道の上に再現して、明治初期の文樂を双肩に負うて、藝と名望を兼ねた有徳人と謳はれた。

妻女は梅園女史、畫家で明清樂の師匠といふ奇才、それが三助あがりの藝人と家庭を持つて圓々満々、縁は異なるもの味なもの生き標本と評判された春太夫は「わしは藝人ぢやが奥さんは先生ぢや」と、いつも平氣で先生々々と呼んでいた。明治十年七月廿五日七十歳で落命、その末期に梅園女史は涙の筆を執つて夫の死面を寫生しようとした、フと眼を開いた春太夫「先生、一世一代や、なるだけよい男に描いてや……」これが辭世のオクリとなつた。

臨終にはその人／＼の性情が、水に映る月のようにゆらめいて見えるものか……こうしたユーモラスな臨終もあるが、また、大隅太夫や呂昇のようないたましい最期の表情も忘れられない。